

原田種成著「貞観政要」(新釈漢文大系 95)明治書院 昭和 53 年 5 月 20 日刊を読む

貞観政要はリーダーの必読書

1. 順徳天皇・花園天皇・後土御門天皇が、この書を愛読された記録がある。

そのほか、王朝以来、摂政・関白・幕府・地方豪族及び諸大名、あるいは、僧家・近世の学者や藩学における尊崇については、枚挙にいとまがないが、その中の特筆すべきものについて述べる。

2. 源<sup>みなもとの</sup>頼朝<sup>の</sup>妻の北条政子は、菅原<sup>すがわらの</sup>為長<sup>のため</sup>に命じて、この書を和訳させて愛読し、北条氏は代々、『貞観政要』を重んじている。頼朝自身については、『吾妻鏡<sup>あづまがみ</sup>』等にその記載はないが、頼朝の遺志を継承した政子が、この本を和訳させていることは、頼朝もまた『貞観政要』を愛読していたものに違いない。

3. 『貞観政要』は、当時教養人の必読書であったから、僧侶もまたこれを愛読して法話の中に引用していることは、道元の『正法眼蔵』および『正法眼蔵随聞記』に見え、日蓮の遺文の中にも、しばしば用いられている。そればかりか、日蓮が自身で筆写した『貞観政要』の一部が現存していることは、単なる宗教家ではなくして、政治に対する関心が深かった日蓮が、『貞観政要』を愛読し、自ら全十巻を書写したことは、さもありませんと思われる。

4. 徳川家康は特に『貞観政要』を愛好し、文禄 2 年(1593)には、藤原<sup>せいか</sup>惺窩を召して講義させ、さらに慶長 5 年(1600)2 月には、足利<sup>あしかが</sup>学校の<sup>しょうしゅう</sup>庵主<sup>の</sup>三要<sup>に</sup>に命じて『貞観政要』を開版させている。これが、いわゆる慶長版(伏見版)である。これは、関が原の戦い(この年の 9 月)の起こる半年も前のことであり、慶長 20 年(1615)の大坂夏の陣に先だつこと 15 年である。そのときに、この『貞観政要』を開版したという一事によっても、そのころすでに、家康に天下を經營し、治平の策を講じようとした志があったことを知ることができる。

5. 織田<sup>おだ</sup>・豊臣<sup>とよとみ</sup>の時代は、馬上にて天下を取った時代であったが、徳川家康は、戦乱が治まって平和が来たときには、學術を盛んにすることが政治の良策であるとし、平和の到来が近いことを見通し、書籍の出版に着手し、しかも、その第一に『貞観政要』を取り上げたということは、徳川三百年の太平の基礎を築いた理由の一面をうかがうことができる。(以上の詳細は拙著『貞観政要の研究』参照)

[コメント]

経済同友会や同友クラブでお世話になっている昭和女子大副学長の前原金一氏から、リーダーとして読むべき本としてこの「貞観政要」を教えて頂いて以来、座右の書としている。特にこの原田種成先生の著作は「貞観政要」のほぼ全容を示し、通釈を付したのものとして世界に一冊しかない著作として高く評価される。ここに書き抜いた部分には、足利学校が徳川家康の命により「貞観政要」の開版をし、江戸時代のリーダー育成に役立ったことが記されており、非常に有難く、また興味深く思った。これからのリーダーは必読書として毎日の「音読」をお勧めしたい。

- 2009年2月13日林明夫記 -